

## 向こう岸からの問いかけ

西川長夫

今日は蒸し暑いなかをお集まりいただき、ありがとうございます。「国民国家と多文化社会」というテーマで地球上のさまざまな地域に焦点をあてながら、連続の講座を開いて考えるという試みも、今回で第8シリーズということになりました。ようやく念願のラテンアメリカに到着しました。連続講座は、最初は一回か二回のシリーズで終わるかと思っていたのですが、ここまで引き続いてやってきて、それから、それをまとめた本もすでに3冊、3部作を出すことができました<sup>(1)</sup>。この講座の講師を快く引き受けていただいた、それぞれの領域の第一線の専門家の方々、あるいはコメンテーターの方々、研究所のスタッフの地道な努力もありました。もう一つ、忘れてならないのは、こうして聴講を続けてくださって、無言で、ときには議論に参加して、この講座を支えてくださった皆様方の支援です。最初に感謝の気持ちを述べさせていただきます。

今日のプログラムですが、今、手元に渡っていると思います。最初に私の基調報告とありますが、これは何かの手違いで、実はそんな大袈裟なものではありません。今日は6年くらい続いてきた講座が初め何を目指して、そして今どういうところに来ているか、大袈裟な言葉で言えば、一種の中間報告的なお話しを、ごく簡単にさせていただきたいと思いません。

昨年この研究所は創立十周年を迎えて、かなり大がかりな記念シンポジウムが3日間にわたって行われました。その時の共通テーマは、「21世紀的世界と多言語・多文化主義一周辺からの遠近法」です。このテーマは、この研究所と連続講座の性格をかなりよく表していると思います。ここで一つのキーワードは、「多言語・多文化主義」です。もう一つ、それより大事なのは、「周辺からの遠近法」とありますが、「周辺」という言葉です。連続講座の8つ

のシリーズに共通しているのは、中心からではなくて周辺からの視座をどのようにして設定することができるのか、ということであったと思います。もう少し具体的に言うと、近代の歴史的な展開の中で、国民国家あるいは国家間システムが形成されていなかで、「周辺」、つまり少数民族やマイノリティーがどのように扱われてきたか、どのようにそれに抵抗してきたか、そういうところに注目して国民国家や近代の本質を見ていこうということでもあります。中心から見た世界の風景と周辺から見た世界の風景は全く異なります。例えば、開発に対する政府の立場と、それによって生活の場を奪われる先住民の立場を考えてみれば、すぐ想像がつくことです。

このシリーズでカナダとオーストラリアの多文化主義の問題を扱ったときに、私たちは特に先住民の問題を重視しました。先住民の問題を視野に入れるか否かで、多文化主義の評価はかなり異なってきます。多文化主義を単なる抽象的な原理として取り出せば、それはあらゆる民族の文化の独自性を尊重して、先住民や少数民族にも平等の権利を与え、共存を図ろうとする原理ですから、それだけを取り出せば極めて好ましいものとなります。特に日本の現実と比較すれば、格段の差があるということになります。しかし、歴史的な現実のなかで、先住民の側からその問題を観察すると何が見えてくるか。ここで詳しく述べることは省略しますが、結論だけを言うと、私自身は、多文化主義は、「一言語一民族一国家」という国民国家の原則が成り立たなくなった時代、つまり、国民国家が崩壊しようとしている時代の新たな国民統合のための原理と方策、見方によっては、国民国家の救済策であると考えています。

なぜ、多文化主義がアメリカ、カナダ、オーストラリアといった英語圏でおこったのでしょうか。そ

れはおそらく、大英帝国の崩壊と関係がある。つまり、「新大陸」を植民地化して先住民を放逐し、そこに自分たちの国を作り上げたこれらの国々のヨーロッパ系の住民たちは、その土地に今なお居続けることの根拠、つまり、彼らがそこに存在し続ける正当性を何に求めればいいのかということです。多文化主義はその正当性の根拠を与えてくれるものだろうと思います。

ヨーロッパ統合のなかの多文化主義も、そういう先住民との関係では違いますが、「一言語一民族一国家」というものが崩壊していくなかでの新たな統合の原理に関わっていると思います。だが、それが依然として、国民統合の一つの形態であるということは何を意味するか。そうすると、民族や文化の差別についてのある程度の改善はあるとしても、基本的には中心—周辺という差別と搾取の構造は変わらない。あるいは、むしろ差別が隠蔽されて、より欺瞞的になるという面が出てくると思います。

1970年代から始まった多文化主義政策は、同時に、歴史の書き方、歴史叙述を変えたと思います。米国やカナダやオーストラリアの歴史は、かつては移民の歴史から始まったわけです。今では、先住民の歴史から語り始めなければならない。そうすると、建国記念日がどうなるかということはおもしろい問題です。ヨーロッパから来た植民者たちは先住民を絶滅しそなった結果として、今では自分たちの歴史を先住民から書き始めなければならない。例えば、オーストラリアのキャンベラの国立博物館に行きますと、一番目立つ場所に大きなスペースをとって置かれているのは先住民の芸術である、というように時代が変わってきました。つまり、ヨーロッパの征服と支配の500年の後で世界史の書き換えが始まっているということです。だが、果たして、それは可能であろうかという問題があります。

ここで先住民自身の声を聞く必要があると思いますが、私たちの研究所では2年ほど前に、オーストラリアの先住民の代表の方をお招きしてお話を聞いたことがあります。一人は、ポール・サンピ、もう一人はロバート・エディントンです。お二人は、マーロー・モーガンの『ミュータント・メッセージ』が先住民の生活や文化にかんする虚偽の情報を広め

ていることに対する抗議のための運動で米国を訪れ、その後で日本に来ました。丁度マーロー・モーガンが京都で講演するという日程に合わせて京都に来て、立命館にも来ていただきました。

そのとき、特に強く印象に残ったことが2つあります。一つは、『ミュータント・メッセージ』、これは米国の女性がオーストラリアの先住民のなかに入って生活し、その魅力に惹かれて、そのことの報告のような文章ですが、それに対するお二人の非常に強い批判の仕方です。これは単に真実を曲げている、虚偽であるというだけでなく、先住民の文化を食い物にする、いわば文化の搾取であり横領であるという批判。もう一点は、お二人の自分たちの文化に対する絶対的な誇りと自信。それはほとんど自民族中心主義と言ってもいいものでした。民族の純粋性ということを強調する。それから、家父長的家族主義というものを賛美する。そして、ちょっと驚いたのは、自分たちは最も古い民族であるという主張です。4万年くらい前から続いている世界で最古の民族である、と言っている。全人類が自分たちから始まったかのような語り方です。これは、絶滅の寸前まで追いつめられ、そのなかで生き残りを賭けて抵抗し続けて生きぬいてきた人たちが、自らを励ますための、生き続けるための神話なのだと感じました<sup>12)</sup>。

一つの例で全てを押し量ることはできませんけれども、私はこの二人の話しを聞いて以来、二つのことが疑問でした。一つは、先住民の歴史から語り始めるカナダやオーストラリアの歴史は、果たして可能であろうかという疑問です。どのように語られようと、それは先住民の側から見れば、先住民の文化的搾取あるいは横領になってしまうのではないか。かつての侵略者・植民者が、先住民に代わって、あるいは先住民のために、彼らの歴史を語ることは可能であろうかという問題。もし、それが可能であれば、どうかたちでそれが実現できるのか。大変難しい問題だろうと思います。残された少数民族、あるいは絶滅させられた少数民族を、誰が語ることができるか。これは、『SHOAH』で語られたユダヤ人の問題にも重なってくる問題です。

それからもう一つの疑問は、先住民の神話的な歴

史が、植民者を含めた他の民族の普遍的な歴史となりうるだろうかということです。つまり、先住民の側から語られた世界史は可能かという問題です。先住民の歴史は、その出発点から、あるいはその根本から、近代的な歴史概念に相反するのではないか。そもそも、それは歴史ではありえないのではないかという疑問です。支配者に対して民族独立の立場から書かれた世界史がどういうものになりうるのかという問題につながる問題ですが、それは結局、もう一つの世界史、つまり、西欧的世界史の裏返しになってしまわないだろうか。例えば、現在の中国人がその国民的な立場から世界史を書くと、それはどうかたちをとるだろうかということを、お二人の先住民の話しから考えさせられました。

最近、インドの下層民を対象にした、いわゆるサバルタン研究についての言及や記述が多くなってきました。例えば、ガヤトリ・スピバックは、「サバルタンは語るができるか」という問いを自ら出して、結局、その答えは否定的です。これを歴史のレベルにおいて考えたときに、サバルタンの歴史は可能であるか、ということになると思います。スピバックは勿論ノーと答えるでしょう。つまり、歴史を語っているのは常に歴史の言葉を駆使する人たち、つまり西洋化されたエリートであって、もはやサバルタンではないというようなパラドクスがあります。フェミニズムでもそういう問題が指摘されていて、女性は語るができるか。女性が語り始めるとそれは男性の言葉を語る、つまり、国家の言葉を語ってしまう。そういう言い方をすると、サバルタンは歴史を語り始めるや否や、西洋的歴史を語ってしまうような問題があると思います。サバルタン研究のなかでネルーの書いた歴史『インドの発見』に対する批判が強くなってきているようです。この問題にかんしては、わたしたちの研究所の創立10周年記念のシンポジウムにお招きしたキャン・プラカーシュさん論文（「もうひとつの近代：植民地主義、ナショナリズム、インドという理念」『立命館言語文化研究』11巻1号）を御参照下さい。プラカーシュさんは著名なサバルタン研究者の一人ですが、かつてのわたしたちの敬愛していた魅力的な歴史家が批判にさらされている。それは日本の戦後歴

史学の場合も同じだと思います。

現在はグローバリゼーションが日常生活の末端にまで及んできている、つまり日常生活の世界化という現象があつて、世界の統一的なイメージを私たちは持ちたい、あるいは持たねばならないという要請が一方であつて、他方で世界史成立の根拠が疑われているというパラドクシカルな現実がある。私たちは、この矛盾をいかにして解決すればいいかという問題に直面しているのではないのでしょうか。

話しは少し遠くまでいってしまいました。「向こう岸からの問いかけ」という問題、つまり、周辺やマイノリティという、この連続講座の視座を深めていくと、当然そういうところにまで話しがいつてしまう時代に、私たちは生きているのではないかと思います。この連続講座が直面しているいくつかの問題を今お話したわけですが、今日から始まる第8シリーズは、新しい世界、新しい視野、新しい問題、今までと異なった回答が出されてくるのではないかと期待しています。このシリーズを中心になって企画してくださったのは、ここにいる原毅彦先生、ボリビアをフィールドにしている人類学者です。このプログラムに記載された文章を読んでいただくと分かると思いますが、今までの連続講座とはちょっと違ったスタイルがここに出現しています。どういう展開になるのでしょうか。たいへん楽しみです。

今日はその第一回で、石原保徳先生をお招きできたことを私たちは大変嬉しく思っています。石原さんの紹介は後で司会者の方からあると思いますので、ちょっと個人的なことだけを最初に述べさせていただきます。私が最初に石原さんにお会いしたのは、石原さんが『思想』の編集長をしておられたときです。1973年の1月の『思想』に、私の処女作と言ってもいい論文「ボナパルティズム概念の再検討」を掲載していただきました。これはそのときの編集長だった石原さんの特別な計らいで、全くの無名の新人に、枚数も規定の2倍くらいの90枚近かったのでしょうか、巻頭論文として載せていただいたということがありました。この論文は今から思うと、私が批判的な視座を作り始めた、要するに、自分で考えて自分の力で歩み始めた最初の論文です。これが発表されていなかったら、私の現在はちょっと違

ったものになっていた、ひょっとしたらもっと幸せな人生を歩んでいたのではないかと思います。

それ以来、石原さんが編集者として完成された「大航海時代叢書」という先駆的なお仕事、ああいうものはもう二度と出ないのではないかと思います。石原さんは編集の仕事をしているときから文章も書いておられました、今では編集ではなく自分で書く仕事に専念されておられます。長年の実績をもとにしてそういうお仕事を今やっておられるわけです。石原さんの知識と厳密さと情熱には、私などは足下にも及びません。石原さんの紹介に「叙述家」とありますが、これは困ったなあと思っていました。石原さんを何と形容したらいいのか。私が理想とする、「非あるいは反アカデミックな学者」、あるいは私自身が目指しているものの先達として私は石原さんを尊敬しています。肩書きだとか名称を超えた存在だと思います。私はずっと、石原さんの方が私より年長である、先輩であると思い込んでいま

した。最近になって私の方が一歳年長であるということを知り愕然としました。長いお付き合いですけど、石原さんの講義を聞くのは今日が初めてです。大変緊張して興奮しています。どうか、よろしくお願ひします。

- (1) 西川長夫・宮島喬編『ヨーロッパ統合と文化・民族問題—ポスト国民国家時代の可能性を問う』（人文書院，1995年）  
西川長夫・渡辺公三・ガバン・マコーマック編『多文化主義・多言語主義の現在—カナダ・オーストラリア・そして日本』（人文書院，1997年）  
西川長夫・山口幸二・渡辺公三編『アジアの多文化社会と国民国家』（人文書院，1998年）
- (2) 次の二つの文章を参照されたい。  
— Paul SAMPLI/Robert EGGINGTON; *How Long must the Cultural Appropriation of the Other Continue?*  
— Richard TANTER; *Appropriation and dialogue in the global cultural economy: against Marlo Morgan's **Mutant Messenger Down Under**.*